

ヘザー・ブーシエイ他編

ピケティ以後

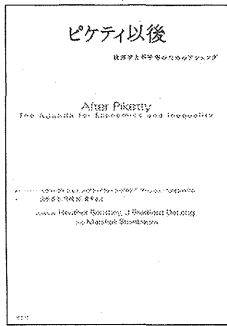
経済学と不平等のためのアジエンダ

経済学の書物としては異
た広範な影響を一望できる
例のベストセラーとなった
だろ。

『21世紀の資本』でピケ
ティが主張したのは、次の
ような事柄だった。第二次
世界大戦後、一九四五年か
ら一九八〇年頃にかけての
先進諸国は、「社会民主主
義」の体制であったといえ
る。この時期はどの国も比
較的平等な社会であった。
しかし当時の平等は、戦争
によって例外的にもたらさ
れたという側面が強い。戦
争がなければ、二〇世紀に
おいても、経済格差は広が
っていったであろう。

その後ピケティの理論
は、専門家たちによってど
のように評価されたのであ
ろうか。本書は二四人の執
筆者が、各方面から『21世
紀の資本』を批判したり拡
張したりした研究成果の集
大成である。二〇一五年に
イタリアで開催された国際
学会の成果から生まれたも
のだという。本書を読むと
、ピケティが学界に与え

全体の一〇%、北欧諸国で
は全体の七〇%にまで、それ
ぞれ達している(二〇一〇
年の段階)。北欧諸国を含
めて、経済格差が広がって
いる。
とはいつても富者たち
は、所得を資本収入から得
ているわけではない。デー
タによれば、富者たちは主
として労働によって所得を
得ている。この点には注意
が必要であろう。資本があ
たかもそれ自体の運動によ
って富者を創り出している
止められなかったようにみ
える。あらゆる資産に課税
するとう彼の案は実効性
に欠けるからである。問題
は深刻であるが、実効的な
政策が見当たらない。
おそろしくピケティの理論
をめぐる評価は、今後の世
界経済のパフォーマンスに
大きく依存するように思わ
れる。ピケティによれば、
二〇世紀の中葉(社会民
主主義)の時代)において
は、総民間資産(「富」と
年間所得の比率は三倍程度
であった。「ヘルエボック
の編者たちも指摘するよ
うに、ピケティに対する批



A 5判・656頁・5400円
青土社
978-4-7917-7136-3
TEL. 03-3294-7829

判の中身があまりにも薄い
という点である。批判は膨
大であるが、それらを総括
してもあまり美り豊かなじ
ジョンにはいたらないとい
う。ピケティの本は、論争
的であったわけではない。
『21世紀の資本』は、経済
格差の現状を歴史的に壮大
なスケールで報告したので
あり、その成果はますます
称賛されるべきなのであ
ろう。その一方で彼の政策
提案は、あまり真剣に受け
止められなかったようにみ
える。

『21世紀の資本』が与えた広範な影響

—二四人の研究成果の集大成—

橋本 努

という風には言えない。で
え。あらゆる資産に課税
するとう彼の案は実効性
に欠けるからである。問題
は深刻であるが、実効的な
政策が見当たらない。
おそろしくピケティの理論
をめぐる評価は、今後の世
界経済のパフォーマンスに
大きく依存するように思わ
れる。ピケティによれば、
二〇世紀の中葉(社会民
主主義)の時代)において
は、総民間資産(「富」と
年間所得の比率は三倍程度
であった。「ヘルエボック
の編者たちも指摘するよ
うに、ピケティに対する批

得」の比率の上昇は、はた
上国においては、大規模な
中間層が形成され、所得の
平等が達成されているから
である。この事実から推測
すると、二〇世紀後半にお
ける先進諸国の平等も、戦
争によって例外的にもたら
されたのではなく、近代の
産業化それ自体によっても
たらされた可能性がある。
平等化は、産業化のプロセ
スと関係しているのかもしれない。
ピケティは、二〇世紀後
半の先進諸国における平等
が、戦争という例外的な条
件によってもたらされたと
考えた。しかしクリストフ

悪いのか」という根本問題
がある。例えば経済格差が
あっても、人々のあいだに
「機会の実質的な平等」が
あり、最も恵まれない貧し
い人たちの生活水準が上昇
していくのであれば、それ
ほど悪くないと言われるか
もしれない。おそろしく問題
は、そのような社会が本当
に実現するのか、という点
であろう。
アン・ケースとアングス
・デイトンの研究によれ
ば、一九九九年から二〇一
三年にかけて、中年アメリ
カ人の自殺や薬物過剰摂取
による死亡率はきわめて増
大したという。また「富」
が世襲される社会では、経
済における創造的破壊が生
じにくいため、発展それ自
体が殺られるという問題も
ある。例えば低所得層の人
々は、自分自身や子供、あ
るいは事業に投資するイン
センティブを殺がれてしま
うかもしれない。もしその
ような状況が生じるなら、
経済格差は、経済成長の観
点からみても決して望まし
くない。ピケティは、必ず
しも格差のない平等な社会
が望ましいと言っているの
ではない。このまま経済格
差が広がると、経済
全体が停滞するかもしれな
いということに危惧するの
である。この停滞の問題を

によって拡大するだろうと
予想される。実際、ピケテ
ィは本書に所収された「応
答」論文のなかで、そのよ
うに想定している。
しかしニールセンによれ
ば、富の世襲によって階層
間移動が停滞することを示
すよいデータは存在しない
のだという。残念なこと
に、この分野のデータはか
なり不備で、明確なことが
言えない。そこで現在、平
等主義者も非平等主義者も
賛成できる政策は「早期児
童教育」であり、ピケティ
のいう資産税ではない、と
いうのがニールセンの主張
である。ニールセンによれ
ば、重要なのは格差の拡大
そのものではなく、格差社
会の中で、人的資本の形
成と階層間移動の確保が同
時に達成されるような社会
である。そうだとすれば、
重要なのは階層間移動を計
測するための精緻な統計調
査を、いち早く充実させる
ことではないだろうか。か
かる統計分析の進化は、格
差問題の解決に大きなイン
パクトを与えるだろう。
この他、経済に関するさ
まざまな格差が、どれだけ
経済の安定性や成長を阻害
するものなのかについて、
サヴァトール・モレルの
論文(第十七章)は総合的
に検討している。だがその

学術思想

結論は微妙なものであり、
今後の研究に期待を抱かせ
るものである。
ピケティの理論と政策に
は批判もあるが、批判者た
ちの批判もまた評価されな
ければならない。問題は格
差に対する私たちの公正感
覚である。ピケティは格差
がどんどん広がっている
というが、ではどの時点で格
差を拒否すべきなのか。に
わかには格差を全否定する
ことはできないであろう。
しかしピケティ理論が私た
ちを震撼させるのは、格差
をめぐる私たちの規範的意
識それ自体も、長期的にみ
れば資本の運動を通じて変
化してしまうとみなす点に
ある。この点でピケティ
は、下部構造によって上部
構造が規定されるというマ
ルクスの発想を受け継いで
いるのであり、私たちの規
範意識を揺るがすほどの
「理論」を提起したのであ
る。本書に収められた批判
者たちの諸論文を読んで、
私はこの点にあらためて気
づかされた。(山形浩生・
守岡桜・森本正史訳) (は
しもと・つとむ北海道大
学教授・経済思想)

★ヘザー・ブーシエイ
ワシントン公平成長セン
ター所長。